究極の外国語学習者の記録（2）

―― 高野秀行の外国語使用① ――

山　内　博　之

1. 問題意識

高野秀行というノンフィクション作家がいる。高野氏の HP（オフィシャルサイト）によると、高野氏のモットーは「誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白おかしく書く」であり、ご自身を「辺境･探検･ノンフィクション作家」と位置づけている。

高野氏は、海外での怪獣探し等の目的のために、多数の言語を学び、身につけた。山内（2020）においては、作家としての高野秀行ではなく、外国語学習者としての高野秀行に注目し、どのようにして 25 もの言語を学んだのかを記録した。

本稿では、学習した言語をいかに使用しているかを記録する。つまり、外国語使用者としての高野秀行に注目するということである。高野氏は、多数の言語を学んでいるので、まず、どの言語の使用に着目するかが問題なのだが、本稿では、高野氏のご著書である『西南シルクロードは密林に消える』を調査対象とし、その中での高野氏の外国語使用を記述することにした。

『西南シルクロードは密林に消える』を執筆するために、高野氏は、成都（中国）からカルカッタ（インド）まで移動している。1 回の取材旅行の距離としては、おそらく、この時が最長であろうと思われ、また、単に物理的な距離が長いだけでなく、高野氏が使用した言語の種類も、この時が最も多いのではないかと思われる。それが、『西南シルクロードは密林に消える』を調査対象として選んだ理由である。

本稿の目的は、『西南シルクロードは密林に消える』を調査対象として高野氏の言語使用のありようを記述することである。そのため、まず、第 2 章では、

調査方法の詳細を述べる。そして、第３章では、『西南シルクロードは密林に消える』の取材旅行における高野氏の言語使用の実態を示す。そして、第３章で示した言語使用の実態をデータとして、第４章では、使用した言語に関する分析を行ない、第５章では、会話の相手に関する分析を行なう。そして、第６章では、この研究のまとめについて述べる。

なお、本稿における国名と言語名については、すべて『西南シルクロードは密林に消える』で使用されているものと同じものを使用することにする。

2. 調査方法

調査対象とするのは、以下の書籍である。

・高野秀行（2009）『西南シルクロードは密林に消える』講談社（講談社文庫）

シルクロードとは、東洋と西洋をつなぐ歴史的な交易路であり、一般に知られているのは、西安からヨーロッパに抜けるルートである。西南シルクロードというのは、それとは異なり、中国四川省の成都からビルマ北部を通ってインドに抜けるルートである。第二次大戦後、この西南シルクロードを陸路でたどった人間は誰もおらず、その偉業を達成したのが高野氏なのであるが、この『西南シルクロードは密林に消える』はその時の記録である。『西南シルクロードは密林に消える』における高野氏の出発地は成都であり、到着地点はカルカッタである。成都とカルカッタには、もちろん一般人でも行くことが可能だが、その間のビルマ北部とインド北東部は、少数民族ゲリラと政府軍の紛争地域となっているため、一般人の通行は不可能である。そのため、高野氏は、知り合いの少数民族ゲリラの力を借りて、その紛争地域を通り抜けている。

このように、高野氏の目的は、少数民族ゲリラの助けを借りつつ、西南シルクロードを陸路で踏破することなのだが、本稿の目的は、『西南シルクロードは密林に消える』をデータとして、西南シルクロードを踏破する際の高野氏の言語使用のありようを記述することである。

そのため、『西南シルクロードは密林に消える』を読みつつ、以下の方法で、高野氏の会話の記録し、成都からカルカッタまでの「言語活動の目録」を作成した。

・特定の人と特定の場所で会話があったことを示す記述があった時に「会話し

た」と判断し、記録する。なお、同じ場所で複数回、会話をしていても、記録は1度のみとする。また、その場所で起こっていない会話が回想のような形で記述されている場合には記録しない。

・場所の名前を【　】で示す。たとえば、「成都」については、【1. 成都（チョンドゥー）】と示す。「1.」は、会話を記録した最初の場所であることを意味している。「成都」以降についても、順番に番号を振っていく。

・会話の相手を「(1)安宿の従業員の女の子《中国語》」というように示す。「(1)」は、会話を記録した最初の相手であることを示している。「安宿の従業員の女の子」以降についても、順番に番号を振っていく。また、「《中国語》」は、その会話で使用した言語を示している。会話で使用した言語名を《　》で示す。

・会話の内容が、以下の①に該当する場合には、会話相手の名称の前に「★」を記し、②に該当する場合には「☆」を記す。

①政治・経済等の話（抽象的・社会的な話）　⇒ ★

②身の上話（具体的な事実に関する話）　⇒ ☆

会話の内容が、上記の①に該当する場合は、「(19) ★中年男トム《英語》」のように記す。同様に、上記の②に該当する場合は、「(17) ☆カン・プンさん《シャン語、タイ語、英語》」のように記す。「★」と「☆」の記号は、その会話の内容に深みがあったということを示している。

以上のルールに基づいて、成都からカルカッタまでの「言語活動の目録」を作成した結果、会話が行なわれた場所は「34 地点」、会話相手の人数は、延べで「121 人」、異なりで「85 人」となった。ちなみに、延べと異なりの人数に差があるということは、複数地点で会話をした相手がいることを示している。

このようにして、いったん、「言語活動の目録」を作成したのだが、何語で話したのかがわからない会話例が多数現れてしまった。そこで、高野氏に直接会ってお聞きし、会話をした際の言語名を記入していった。しかし、会話の場面が非常に多かったためか、高野氏自身、何語で会話をしたのかを覚えていないということがあった。高野氏にお聞きしても言語名がわからなかったのは、会話相手の人数で言えば、「延べ 9 人、異なり 8 人」であった。言語名がわからなければ、分析のしようがないため、これらの会話の記録については、「言語活動の目録」から削除することにした。

3. 言語活動の目録

前章で示した方法で作成した、成都からカルカッタまでの「言語活動の目録」は、以下のとおりである。

【1. 成都】
(1) 安宿の従業員の女の子《中国語》
(2) 犬売り場のおばちゃん《中国語》
(3) うさぎ売り場の女の子《中国語》
(4) カラオケ・ビデオ販売店の付近にたむろするチベット人の支族らしき人《中国語》
(5) 四川料理の店の人《中国語》
(6) 貸しボート屋の従業員《中国語》
【2. 宜賓】
(7) バスで近くに座ったプレスリーのようなもみあげのおじさん《中国語》
【3. 珙県（ゴンシェン)】
(8) バスの運転手《中国語》
【4. 威寧】
(9) 宿の関係者やら無関係者やら《中国語》
(10) 宿の主人一家や友人《中国語》
(11) 宿の主人の甥（朱君）と友人たち《中国語》
(12) 苗族の女の子や村長たち《中国語》
【5. 大理】
(13) 客引き・物売り《中国語》
(14) カフェのウェイトレスとオーナー《中国語》
(15) 鵜飼の揚さん《中国語》
【6. 瑞麗】
(16) 回族レストランの従業員《中国語》
(17) ☆カン・プンさん《シャン語、タイ語、英語》
(18) クン・ヌーム《中国語》
(19) ★中年男トム《英語》
(20) コロンボ似の刑事たち《中国語》
(21) 瑞麗のホテルの従業員たち《中国語》
(22) 散歩で出会う道端の人たち《中国語》

(23) シャン式賭博の屋台の人々《中国語》
(24) ツァム・ヤン大佐《英語》
(25) ラ・セン中尉《ビルマ語、カチン語》
(26) タン・グン軍曹《ビルマ語、カチン語》
【7. 盈江】
(27) 盈江警察署のビルマ人担当《ビルマ語、英語》
(28) ラ・セン中尉《ビルマ語、カチン語》
(29) 同行したカチン人の２人《カチン語》
【8. ライザ】
(30) ゾウ・リップ《英語》
(31) トゥ・ジャ書記長《英語》
【9. パジャウ〔カチン軍総司令部〕】
(32) ★ツァム・ヤン大佐《英語》
(33) ゾウ・リップ《英語》
(34) 渡哲也そっくりのトーン・ラ中尉《ビルマ語》
【10. ウタウ〔第三大隊キャンプ〕】
(35) ゾウ・リップ《英語》
(36) キャプテン（大隊キャンプの大尉）《ビルマ語》
【11. スンブラ・ヤン村】
(37) ゾウ・リップ《英語》
【12. パンツァオ村】
(38) ★ゾウ・リップ《英語》
【13. ンマイカ（サルウィン川の支流の岸辺）】
(39) ゾウ・リップ《英語》
(40) ☆金掘りをしている中国人２人組《中国語》
【14. ゾウ行軍の休憩地】
(41) ゾウ・リップ《英語》
【15. 第一旅団本部】
(42) タン・グン（ポーター、説教師）《カチン語、英語》
【16. ガー・カバー村】
(43) ガー・カバー村の住人《ビルマ語、カチン語》
(44) ゾウ・リップ《英語》
(45) ミッチーナに住む治療師《中国語、ビルマ語》
(46) ☆トゥ・ノン少尉（窓際少尉）《カチン語》

【17. 第十一大隊キャンプ】
(47) まだ若い司令官《英語》
(48) ゾウ・リップ《英語》
【18. 第二旅団本部】
(49) 第二旅団の幹部たち《ビルマ語》
(50) スー・チーについて語った老少佐《ビルマ語》
(51) ゾウ・リップ《英語》
(52) ラ・トイ大尉(エピキュリ大尉)《ビルマ語、カチン語、英語》
【19. タナイ】
(53) ★ラ・トイ大尉(エピキュリ大尉)《ビルマ語、カチン語、英語》
(54) 一緒に酒を飲んだ公館付きの将校《英語》
(55) ゾウ・リップ《英語》
【20. ダル】
(56) ラ・トイ大尉(エピキュリ大尉)《ビルマ語、カチン語、英語》
(57) ゾウ・リップ《英語》
【21. ダガ】
(58) ゾウ・リップ《英語》
(59) 将軍様《英語》
(60) ラ・トイ大尉(エピキュリ大尉)《ビルマ語、カチン語、英語》
(61) 兵隊たち《英語》
(62) アヘン中毒者の若者《ビルマ語、カチン語》
(63) ナガ軍の中尉《英語》
【22. スム・リー村】
(64) ゾウ・リップ《英語》
(65) オウン・テ中尉《カチン語》
(66) ラ・トイ大尉(エピキュリ大尉)《ビルマ語、カチン語、英語》
(67) アヘン吸いの男《ビルマ語》
【23. ロン・リ村】
(68) ☆ラ・トイ大尉(エピキュリ大尉)《ビルマ語、カチン語、英語》
(69) ゾウ・リップ《英語》
(70) オウン・テ中尉《カチン語》
【24. ルン・コン村】
(71) ☆セントゥ《英語》

【25. ラ・ホン村】
(72) ゾウ・リップ《英語》
【26. ナガ軍（K）カウンシル】
(73) ☆セントゥ《英語》
(74) ナガ軍幹部（宿泊した小屋への訪問者、酒宴参加者）《英語》
(75) ゾウ・リップ《英語》
(76) オウン・テ中尉《カチン語》
(77) 議長の秘書を務めるアン・マイ少佐《英語》
(78) クガル《英語》
(79) カチンの兵隊たち《カチン語》
(80) ラ・トイ大尉（エピキュリ大尉）《ビルマ語、カチン語、英語》
(81) ☆サン・オウン（大尉の息子）《英語》
(82) カプラン議長《カチン語》
(83) カチンの将兵たち《英語》
【27. ラ・ホン村】
(84) クガル《英語》
(85) サン・オウン（大尉の息子）《英語》
(86) ナガ軍の将校《英語》
【28. ディブルガ】
(87) 車を運転している男《英語》
(88) インド軍のでっかい将校《英語》
(89) サン・オウン（大尉の息子）《英語》
(90) クガル《英語》
【29. モクコチュン】
(91) ワールドカップを見ている人《英語》
(92) ★キヴィ（キトゥヴィ書記長宅の世話係の男）《英語》
(93) アレップ《英語》
(94) ★サン・オウン（大尉の息子）《英語》
(95) ☆クガル《英語》
(96) ベンダン《英語》
(97) ベンダン宅で紹介された人（有力なビジネスマン）《英語》
(98) ベンダン宅で紹介された人（州都コヒマの大学教授）《英語》
(99) ベンダン宅で紹介された人（州立モコクチュン法律学校校長）《英語》
(100) ベンダン宅で紹介された人（州立モコクチュン法律学校事務長）《英語》

（101）サン・オウンの養父母《英語》
（102）ワパン（ベンダンの親友ビジネスマンの次男）《英語》
【30. ディマプール】
（103）ワパンの親せきの家の人々《英語》
（104）★ワパン（ベンダンの親友ビジネスマンの次男）《英語》
（105）ホンコン・マーケットの女の子《英語》
（106）車内警察の男《ヒンディー語》
（107）警官たち《英語》
【31. カルカッタ】
（108）ワパン（ベンダンの親友ビジネスマンの次男）《英語》
（109）サダル･ストリート近辺にあるわりと高級なホテルのフロント《英語》
（110）郵便局《英語》
（111）カルカッタ警察の署長《英語》
（112）取り調べをする人たち《英語》

以上のように､｢言語活動の目録｣は､成都における「安宿の従業員の女の子」との中国語による会話から始まり、カルカッタにおける「取り調べをする人たち」との英語による会話で終わっている。第4章と第5章では、この「言語活動の目録」の分析していく。

4. 使用した言語に関する分析

この章では、前章で示した「言語活動の目録」を用いて、使用した言語に関する分析を行なう。

「言語活動の目録」によれば､会話が行なわれた場所は､【1. 成都】から【31. カルカッタ】までの「31地点」である。そして、会話相手の人数は「延べ112人、異なり77人」であり、使用言語は､「英語、中国語、カチン語、ビルマ語、タイ語、シャン語、ヒンディー語」の7言語であった。この章では､「英語、中国語、カチン語、ビルマ語、タイ語、シャン語、ヒンディー語」という7言語の使用実態を示していく。

「言語活動の目録」を見ると､会話相手については､｢3つの言語で話した相手」と「2つの言語で話した相手」と「1つの言語で話した相手」がいることがわかる。その人数の内訳を示したのが、次の表1である。

表 1. 言語数別の会話相手の人数

	人数（異なり）	人数（延べ）
3 つの言語で話した相手	2 人	8 人
2 つの言語で話した相手	7 人	8 人
1 つの言語で話した相手	68 人	96 人
合計	77 人	112 人

「人数（異なり）」と「人数（延べ）」の違いが少しわかりにくいかもしれない。たとえば、「3 つの言語で話した相手」の異なり人数が 2 人で、延べ人数が 8 人になっていることについては、3 つの言語で話した相手は「カン・プンさん」と「ラ・トイ大尉」の 2 名だけなのだが、この 2 人で合計して 8 地点で会話しているため、延べ人数が 8 人となっているということである。

ちなみに、高野氏は「カン・プンさん」とは「シャン語、タイ語、英語」で話しており、「ラ・トイ大尉」とは「ビルマ語、カチン語、英語」で話している。このようなことを考慮し、使用した言語別に会話相手の人数を示したものが、次の表 2 である。表 2 では、たとえば、「カン・プンさん」は、シャン語、タイ語、英語のそれぞれで 1 名とカウントされ、「ラ・トイ大尉」は、ビルマ語、カチン語、英語のそれぞれで 1 名とカウントされている。

表 2. 言語別の会話相手の人数

	人数（異なり）	人数（延べ）
英語で話した相手	39 人	71 人
中国語で話した相手	23 人	23 人
カチン語で話した相手	11 人	20 人
ビルマ語で話した相手	12 人	19 人
タイ語で話した相手	1 人	1 人
シャン語で話した相手	1 人	1 人
ヒンディー語で話した相手	1 人	1 人
合計	88 人	136 人

ここでも、異なり人数と延べ人数の違いが少しわかりにくいかもしれないが、たとえば、「英語で話した人」は、実際には「39 人」しかいないのだが、そのうちの何人かとは複数地点で話しているため、延べ人数が「71 人」というように、異なり人数より多くなっている。「39 人の相手と 71 回話した」、あるいは、

「39 人の相手と 71 地点で話した」と考えるとわかりやすいかもしれない。

表 2 に示したように、言語別に数えると、高野氏が会話した相手は、延べ 136 人になるのだが、この 136 人と話した地点を言語別にまとめると、次の表 3 のようになる。

表 3. 成都からカルカッタまでの使用言語の推移

	中国語	英語	ビルマ語	カチン語	タイ語	シャン語	ヒンディー語	合計
1. 成都	6 人							6 人
2. 宜賓	1 人							1 人
3. 珙県	1 人							1 人
4. 威寧	4 人							4 人
5. 大理	3 人							3 人
6. 瑞麗	6 人	3 人	2 人	2 人	1 人	1 人		15 人
7. 盈江		1 人	2 人	2 人				5 人
8. ライザ		2 人						2 人
9. パジャウ		2 人	1 人					3 人
10. ウタウ		1 人	1 人					2 人
11. スンブラ・ヤン村		1 人						1 人
12. パンツァオ村		1 人						1 人
13. ンマイカ	1 人	1 人						2 人
14. ゾウ行軍の休憩地		1 人						1 人
15. 第一旅団本部		1 人		1 人				2 人
16. ガー・カバー村	1 人	1 人	2 人	2 人				6 人
17. 第十一大隊キャンプ		2 人						2 人
18. 第二旅団本部		2 人	3 人	1 人				6 人
19. タナイ		3 人	1 人	1 人				5 人
20. ダル		2 人	1 人	1 人				4 人
21. ダガ		5 人	2 人	2 人				9 人
22. スム・リー村		2 人	2 人	2 人				6 人
23. ロン・リ村		2 人	1 人	2 人				5 人
24. ルン・コン村		1 人						1 人
25. ラ・ホン村		1 人						1 人
26. ナガ軍（K）カウンシル		8 人	1 人	4 人				13 人
27. ラ・ホン村		3 人						3 人
28. ディブルガ		4 人						4 人
29. モクコチュン		12 人						12 人
30. ディマプール		4 人					1 人	5 人
31. カルカッタ		5 人						5 人
合計	23 人	71 人	19 人	20 人	1 人	1 人	1 人	136 人

成都からカルカッタに至るまでの「言語活動の目録」を見ると、高野氏の使用言語は、英語、中国語、カチン語、ビルマ語、タイ語、シャン語、ヒンディー語の7種類なのであるが、そのうち、タイ語、シャン語、ヒンディー語については、使用が、それぞれ1地点の1人ずつのみなので、それほど使用しなかったことがわかる。タイ語とシャン語については、たまたま「カン・プンさん」という人がそれらの話者だったために、高野氏がそれに合わせて使用したのであろう。ヒンディー語についても、同様に、「車内警察の男」がヒンディー語話者だったため、高野氏がそれに合わせたのであろう。[1] つまり、成都からカルカッタに至るまでの、高野氏の使用言語は、主に、英語、中国語、カチン語、ビルマ語の4種類だということである。

表3を見ると、高野氏の言語使用は中国語から始まっていることがわかる。成都から瑞麗までは中国語のみの使用が続き、瑞麗で英語、ビルマ語、カチン語の使用が始まる。瑞麗は、いわば、中国とビルマの接点とも言える地点であり、高野氏は、成都から瑞麗までは独力で移動しているが、瑞麗からは、カチン軍の支配下にある反政府ゲリラに伴われて移動している。

瑞麗以降、「26.ナガ軍（K）カウンシル」までは、英語を中心としつつも、英語・ビルマ語・カチン語の併用が続く。おそらく、英語が通じるのであれば英語で話し、そうでなければ、ビルマ語かカチン語を話すという状況であったのであろう。そして、「26.ナガ軍（K）カウンシル」以降は、インド圏に入ったためか、英語の使用が安定的となる。

ちなみに、表3の中で、使用した言語の種類と会話した相手の数のどちらもが最大値となっているのが、瑞麗である。瑞麗における言語活動を、「言語活動の目録」から取り出して、以下に示す。

【6. 瑞麗】

（16）回族レストラン《中国語》
（17）☆カン・プンさん《シャン語、タイ語、英語》
（18）クン・ヌーム《中国語》
（19）★中年男トム《英語》
（20）コロンボ似の刑事たち《中国語》
（21）瑞麗のホテルの従業員たち《中国語》》
（22）散歩で出会う道端の人たち《中国語》
（23）シャン式賭博の屋台の人々《中国語》
（24）ツァム・ヤン大佐《英語》

(25) ラ・セン中尉《ビルマ語、カチン語》
(26) タン・グン軍曹《ビルマ語、カチン語》

使用した言語の種類が、瑞麗において最も多くなった理由は、中国とビルマの接点ということで、会話相手の言語的バックグラウンドのバリエーションが豊富であったことにあるだろう。また、会話相手の数が最大になった理由は、反政府ゲリラとの接触が瑞麗で始まったことに加え、ホテルで70万円を盗まれるという事件が起こったことにあるだろう。

5. 会話の相手に関する分析

この章では、第3章で示した「言語活動の目録」を用いて、会話の相手に関する分析を行なう。

「言語活動の目録」における会話相手の人数は、「延べ112人、異なり77人」であった。ここでは、まず、会話相手の延べ人数と異なり人数の違いに注目する。延べ人数と異なり人数が違うということは、複数地点で会話をした相手がいるということを意味している。会話をした地点数別に、会話相手の人数と名前をまとめたのが、次の表4である。

表4. 会話をした地点数別の会話相手

地点数	人数	名前《言語》
17地点	1人	・ゾウ・リップ《英語》
7地点	1人	・ラ・トイ大尉《ビルマ語、カチン語、英語》
4地点	2人	・クガル《英語》 ・サン・オウン《英語》
3地点	2人	・オウン・テ中尉《カチン語》 ・ワパン《英語》
2地点	3人	・ラ・セン中尉《ビルマ語、カチン語》 ・ツァム・ヤン大佐《英語》 ・セントゥ《英語》
1地点	68人	省略

表4によれば、最も多くの地点で会話をした相手は「ゾウ・リップ」である。高野氏は、17地点において「ゾウ・リップ」と会話をしている。成都からカルカッタまでの地点数は全部で31なので、その半分以上において、高野氏は「ゾウ・リップ」と会話をしたことになる。

また、表4によれば、高野氏が複数の地点で会話をした相手は「ゾウ・リップ」「ラ・トイ大尉」「クガル」「サン・オウン」「オウン・テ中尉」「ワパン」「ラ・セン中尉」「ツァム・ヤン大佐」「セントゥ」の9名である。この9名が、具体的にどの地点で高野氏と会話をしたのかを示したものが、次の表5である。

表5. 複数地点会話者と会話をした地点

	ラ・セン中尉	ツァム・ヤン大佐	ゾウ・リップ	ラ・トイ大尉	オウン・テ中尉	セントゥ	クガル	サン・オウン	ワパン
1. 成都									
2. 宜賓									
3. 珙県									
4. 威寧									
5. 大理									
6. 瑞麗	●	●							
7. 盈江	●								
8. ライザ			●						
9. パジャウ		●	●						
10. ウタウ			●						
11. スンブラ・ヤン村			●						
12. パンツァオ村			●						
13. ンマイカ			●						
14. ゾウ行軍の休憩地			●						
15. 第一旅団本部									
16. ガー・カバー村			●						
17. 第十一大隊キャンプ			●						
18. 第二旅団本部			●	●					
19. タナイ			●	●					
20. ダル			●	●					
21. ダガ			●	●					
22. スム・リー村			●	●	●				
23. ロン・リ村			●	●	●				
24. ルン・コン村						●			
25. ラ・ホン村			●						
26. ナガ軍（K）カウンシル			●	●	●	●	●	●	
27. ラ・ホン村							●	●	
28. ディブルガ							●	●	
29. モクコチュン							●	●	●
30. ディマプール									●
31. カルカッタ									●

表5を見ると、高野氏は、瑞麗以降は必ず誰かに付き添われて、地点から地点へと移動していることがわかる。『西南シルクロードは密林に消える』の「エピローグ」で、高野氏は自らを「交易品」に例え、カルカッタまで「大勢の人々の手をわずらわせてたどりついた」と述べているが、表5に登場する9名が、まさにその主たる担い手なのであろう。

ところで、高野氏は、この9名とどのような会話を交わしたのであろうか。「言語活動の目録」では、会話の内容が「政治・経済等の話（抽象的・社会的な話）」である場合には「★」が付され、「身の上話（具体的な事実に関する話）」である場合には「☆」が付されている。つまり、「★」か「☆」が付されている会話は、内容に深みのある会話だということなのであるが、表5の9名は、高野氏と「★」や「☆」のレベルの会話を行ったのであろうか。これら9名の会話における「★」と「☆」の数を示したものが、次の表6である。

表6. 複数地点会話者の会話の内容

	★の数	☆の数	星の合計
ラ・セン中尉《ビルマ語、カチン語》	0	0	0
ツァム・ヤン大佐《英語》	1	0	1
ゾウ・リップ《英語》	1	0	1
ラ・トイ大尉《ビルマ語、カチン語、英語》	1	1	2
オウン・テ中尉《カチン語》	0	0	0
セントゥ《英語》	0	2	2
クガル《英語》	0	1	1
サン・オウン《英語》	1	1	2
ワパン《英語》	1	0	1

右端の「星の合計」の欄を見ると、「ラ・セン中尉」と「オウン・テ中尉」のみが「0」であることがわかる。なぜ、「ラ・セン中尉」と「オウン・テ中尉」のみが「0」なのかはわからないが、英語話者でないのは「ラ・セン中尉」と「オウン・テ中尉」のみであり、他の7名は、全員、英語話者である。話の内容の深さが使用する言語の種類と関わっているのか否かは不明であるが、表6を見るかぎりにおいては、高野氏は、英語話者とは、必ず「★」か「☆」のレベルの話をしている。

表6において、高野氏と「★」か「☆」のレベルの話をした7名は、全員、2地点以上に渡って、高野氏と行動を共にしているわけであるが、では、それ以外の人、つまり、1地点でしか会話をしていない人たちとは、高野氏は、ど

のようなレベルの話をしているのであろうか。「★」や「☆」のレベルの話をしているのであろうか。

表4を見ると、1点のみで会話した人の数が「68人」であることがわかるが、このうち、英語で話した人は「32人」であった。その「32人」の会話のうち、★か☆が付されていたのは、以下の2名のみであった。

(19) ★中年男トム《英語》
(92) ★キヴィ（キトゥヴィ書記長宅の世話係の男）《英語》

高野氏と行動を共にした英語話者7名は、全員、高野氏と深いレベルの話をしている。しかし、行動を共にしていない32名のうち、深いレベルの話をしたのは2名のみである。やはり、行動を共にするか否かということと、会話の内容が深いか浅いかということには、密接な関わりがあるのであろう。

6. おわりに

以上、成都からカルカッタに至るまでの、高野氏の外国語使用を観察してきたが、その量と質には、改めて驚かされる。成都からカルカッタに至るまでに要した時間は約4カ月であり、その間に話した外国語は7種類である。会話した相手は77人であるが、地点別にカウントすると112人になり、さらに、それを言語別にカウントすると136人になる。

会話した相手の人数を数える際には、複数地点にまたがって会話した相手がいるため、「異なり・延べ」という概念を使用する必要が出てくる。さらに、複数言語で話した相手がいるために、そこでも「異なり・延べ」という概念を使用しなければならなくなる。つまり、会話の相手が複数地点・複数言語にまたがっているために、「異なり・延べ」という概念を二重に使用しなければならなくなり、会話相手の人数を数えるだけでもかなりややこしくなる。

高野氏が会話した相手は、まず、単純に量が多いのだが、それだけでなく、1言語でしか話さなかった人がいる一方で、3言語で話した人もいるし、さらに、1地点でしか話さなかった人もいれば、17もの地点で話した人もいる。本稿での観察によって浮かび上がったのは、そのような言語使用の実態である。

成都からカルカッタまでの高野氏の移動を「旅行」と呼んでいいものかどうかはわからないが、このぐらいの距離の移動を楽しむ旅行者はいるだろうし、また、4カ月以上にわたって外国に滞在する人も少なくはないだろう。しかし、

そのような人たちであっても、『西南シルクロードは密林に消える』における高野氏ほどの外国語使用を経験することは、まずないであろう。

どうすれば、これほど豊富で濃密な外国語使用を経験できるのであろうか。そのような方法についての考察や、外国語教育・外国語学習への提言については、稿を改めて述べたいと思う。

注

1) ただし、高野氏によれば、この時点ではヒンディー語の能力はまったくなく、「車内警察の男」の身振りを察して対応したのみである、とのことである。

調査資料

(1) 高野秀行（2009）『西南シルクロードは密林に消える』講談社（講談社文庫）

参考文献

(1) 山内博之（2020）「究極の外国語学習者の記録（1）－高野秀行の外国語学習－」実践女子大学内・実践国文学会『実践国文学』第 97 号

（やまうち　ひろゆき・実践女子大学教授）